

トカラ語 B 断簡の伝える Yaśodharā

生野昌範

はじめに

トカラ学は黎明期から言語学と文献学が協力して成り立ち、近年さらに言語学の観点¹からも文献学の観点²からも大いに進展しつつある。しかし、黎明期になされた指摘が今まで検証されることなく現在に至っているものもある。

ベルリンで保管されていたトルファン・コレクションのうちのトカラ語 B によるテキストの多くが 1953 年に公表され、その中に THT 109 という断簡も含まれていた。そして、その THT 109 は左側が大きく欠損した一枚の断簡であるが、この欠損によって不分明となった文脈は根本説一切有部律の *Saṅghabhedavastu* における並行箇所によりかなりの確度をもって再構築されうると注記されていた³。しかし、その後、THT 109 のトカラ語テキスト全体の翻

1 たとえば、HACKSTEIN 1995, MALZAHN 2010, PEYROT 2013, KIM 2018 などを参照。

2 バイリンガル・テキストを除いて、トカラ語のみが使用されているテキストに限定しても SCHMIDT 2006, 2008 (Cf. PINAULT 2008: 109–162; HACKSTEIN, HABATA & BROSS 2019: 1–51); PINAULT 1984, 1989; OGIHARA 2011, 2012, 2013; 荻原 2013 などにおいて多くのトカラ語テキストが同定されている。

3 “Der hier durch die Lücken undurchsichtig gewordene Textzusammenhang läßt sich durch eine Parallele aus dem Saṅghabhedavastu der Mūlasarvāstivādins, die wir Herrn Prof. Waldschmidt verdanken, mit ziemlicher Sicherheit rekonstruieren.” [TochSprR(B) II: 46 = ²TochSprR(B): 131].

訳が公表されることもなく⁴、*Saṅghabhedavastu*におけるその並行箇所がどこであるのかということもいまだに示されていない。それゆえ、本稿では、THT 109 に対するこの注記に関して検討する。

1. THT 109

THT 109 は、使用言語の特徴に関してはトカラ語 B の late (7 世紀以降) に分類され [PEYROT 2008: 219, 204–206]、文字に関しては II-2 (8 世紀) に分類されている [TAMAI 2011: 276–277, cf. PEYROT 2008: 206]⁵。また、THT 109 の写真が、TITUS ならびに CEToM において公開されている。以下に THT 109 のテキストを TochSprR(B) II: 46–47 = ²TochSprR(B): 131–132 に従って提示したのちに⁶、そのトカラ語 B テキストの翻訳を行なう。

109a

2 /// (pañikte kã)ṣṣ(i)⁷ weña ///

4 この断簡の最も多くの範囲を現代語に翻訳し公表しているのは、a4–b4 に対してオランダ語による翻訳を行なった COUVREUR 1953: 287–288 である。

5 文字に関しては、さらに MALZAHN 2007、SANDER 2013、ならびに FELLNER, KOLLER & BRAUN 2019 も参照。

6 トカラ語とサンスクリット語テキストにおいて使用する記号表記は次の通りである：[] は損傷した文字あるいは文字の一部、() は欠損箇所での補い、{} は欠損していない箇所での補い、{} は写本に書かれている文字の削除、{{}} は写本そのものにおいて指示されている削除、· は判読できない音節の一部、– は欠損して失われている音節、+□ は筆者によって修正された語句、* は *virāma*、' は写本には書かれていない *avagraha*、/// はフォリオの破損、○ は紐穴をあけるための空間、r は表面 (*recto*)、v は裏面 (*verso*) を表わす。

7 補いは、TochSprR(B) II: 46, fn. 5 = ²TochSprR(B): 131, fn. 5 による。

- 3 /// (yā)mtts(1)⁸ skāyas⁹ • santsārāṣṣana (eṅka)lwa¹⁰ trenkalwa teṃ ya(knesa)¹¹
- 4 /// (śwatsanma yo)ktsanma¹² ekañenta ārwer yāmormem yāsāṣṣem ñikañcem
wmera wrākaññem [no]¹³
- 5 /// [l](au)pāte¹⁴ • prāp-mahur āssa tässāte • haranma muktihārānta wrākañe
- 6 /// (antiṣ)purāṣṣana¹⁵ klainampa Rāhuleṃ palkasi¹⁶ yalñeṣṣai [ṣ]ewisa Kapila¹⁷
- 7 /// añjāl ṣarne yāmusa cākkār-lakṣāntsa yaituwa klyomñāna lalaṃska¹⁸
- 8 /// na ekañenta pañikte kāṣṣintse ṣesa sānkāmpa carit yamaṣṣa –
- 9 /// [t]e keklyauṣormem po eṅkalwa yaika srotāpattiññe perne kalpa ||

-
- 8 補いは、TochSprR(B) II: 46, fn. 6 = ²TochSprR(B): 131, fn. 6 による。なお、公開されている写真にもとづく、この語より前は $\cdot[t]ṣ\cdot$ と読める。
- 9 TochSprR(B) II: 46, fn. 7 = ²TochSprR(B): 131, fn. 7 は、15 (8/7) 音節 × 4 脚からなる韻文である可能性を示唆している。
- 10 写真に基づく $e[ṅka]lwa$ に見える。
- 11 補いは、TochSprR(B) II: 46, fn. 8 = ²TochSprR(B): 131, fn. 8 による。
- 12 補いは、TochSprR(B) II: 46, fn. 9 = ²TochSprR(B): 131, fn. 9 による。
- 13 TochSprR(B) II: 46, fn. 10 = ²TochSprR(B): 131, fn. 10: “Wohl zu *nau(myeṣṣem)* zu erg. und zu verb.”
- 14 TochSprR(B) II: 46 = ²TochSprR(B): 131 は $[lo]pāte$ とするが、MALZAHN 2010: 858: “As for $[lo]pāte$ in 109 a 5 (thus WTG, 285), the akṣara in question is damaged, so that one can similarly restore the form to $[l](au)pāte$ (as per TochSprR(B) II, s.v., fn. 11)” に従う。PEYROT 2008: § 3.1.6 (pp. 53–54) も参照。
- 15 補いは、TochSprR(B) II: 46, fn. 13 = ²TochSprR(B): 131, fn. 12 による。
- 16 $ts > s$ に関しては、PEYROT 2008: § 3.1.33 (pp. 84–88, esp. p. 86) を参照。a10 の $yānkāssi$ も参照。
- 17 TochSprR(B) II: 46, fn. 14 = ²TochSprR(B): 131, fn. 13: “Wohl zu *kapila(vāstumem)* zu erg.” しかし、abl. として補うことが妥当かどうか判断できない。
- 18 TochSprR(B) II: 47, fn. 2 = ²TochSprR(B): 132, fn. 2: “Viell. zu *lalaṃska(na paine)* zu erg. und zu verb.”

10 /// weña še ka yatā-ne¹⁹ ñis yānkāssi • śukentasa swaro²⁰

- 2 ……仏陀・先生は言った。……
- 3 ……為すために君たちは励みなさい。輪廻にかかわる諸々の激情
[と] 執着を²¹ このように
- 4 ……諸々の食物、諸々の飲物、諸々の付属 [の飲食] 物を用意したの
ちに、金・銀の宝、真珠の……を……
- 5 ……[ヤショードラーは] 塗りつけた (3.sg.)。冠を [自分の] 頭の上
に [ヤショードラーは] 据え置いた (3.sg.)。諸々の真珠、諸々の真珠
の首飾り、真珠の……を
- 6 ……後宮の女性たちをともなってラーフラを見に行くという口実で、
カピラヴァストゥ
- 7 ……[ヤショードラーは] アンジャリを両手に作り、車輪という特長
によって飾られた聖なる柔らかい [両足を]²²
- 8 ……諸々の付属 [の飲食] 物を……。[彼女は、] 僧団ともども仏陀・

19 TochSprR(B) II: 47 = ²TochSprR(B): 132 は yatāte とするが、MALZAHN 2010: 785: “Instead of a 3.sg. middle *yatāte* in 109 a 10, Schmidt, 1974, 34, fn. 6 and 39f. rather wants to read a 3.sg. active *yatā-ne: še ka yatāne ñis yānkāssi • śukentasa swaro(na)* “nur einmal gelang es ihr [scil. Yaśodharā], mich mit süßen Genüssen zu betören”. Thomas, ²TochSprR(B), 262, objects to this reading, because there is, according to him, no positive argument for it; but one can indeed support Schmidt’s claim, because preterits in this kind of paradigm are mostly actives (see chap. Prs III/IV 26.2.4.)”

20 TochSprR(B) II: 47, fn. 5 = ²TochSprR(B): 132, fn. 5: “Erg. zu *swaro(na)* .”

21 (eñka)lwa と trenkalwa は、nom. と obl. (= acc.) が同形であるので、「諸々の激情 [と] 執着が」の可能性もある。

22 Cf. SBhV II 165.1: bhagavataḥ cakrāṅkapādatalacihnatā lakṣanam asti 「世尊には、輪の印がついた足の裏を特徴とすること（／輪の印を足の裏の特徴とすること）が目印としてある」。これは三十二大人相の一つである；cf. Arthav 54.1 (§ 26.2): adhasāt pādatalayoś cakrāṅkitapādatalatā 「両足の裏の下に輪の印がついた足の裏であること」。

先生に行ないを為した (3.sg.)²³ ……

- 9 ……これを聞いたのちに、諸々の激情すべてを [ヤシヨーダラーは] 取り除いた (3.sg.)。預流の位を得た (3.sg.)。
- 10 ……[仏陀・先生は] 言った。[かつて] 一度だけ彼女 (ヤシヨーダラー) が私を諸々の甘味によって魅了する²⁴ ことができた。²⁵

109b

- 1 /// [N]y(a)[g]r[o]dhārām saṅkrāmiś yatsi omtsate Yaśodharai lant[s]o(y)²⁶
- 2 /// [s·] aramśne salāte-ne • k_ucatākmeṃ ṣaṇem²⁷ ette ṣallāte • cauk camelne
- 3 /// kāṣṣintse akṣāre saim-wāsta Yaśodhara lāntsa śika-maiyyaine laraum-
(ñ)e(sa)²⁸
- 4 /// rintsate ñi pelykiṃ • nauṣ ra preśyaine ṇṣa[ṣṣ]e trenkāltsa śaul rintsate tu

23 pañikte kāṣṣintse ṣesa sāṅkāmpa に関するサンスクリット語は同格である可能性が想定されうる ; cf. GMNAI 1: 57 [Vinayavastu MS 148r1] (GilMs III 1.26.6–7): ^(148r1)yan (n)v ahaṃ śramaṇaṃ Gautamaṃ saśrāvakaśaṃghaṃ sarvopakaraṇaiḥ pravārayeyam 「私は弟子の集まりともども沙門ガウタマにあらゆる食物を供与するならば、[どうであろうか]」; Avś I 61.17–62.1: anena śreṣṭhinā tathāgatasya saśrāvakaśaṃghasyaivaṃvidhaṃ satkāraṃ kṛtam 「この組合長によって弟子の集まりともども如来にこのような尊敬がなされた」。なお、COUVREUR は a8 を “... spijzen ... Onderhield zich met de Boeddha-Leraar en [zijn] gemeente...” と訳している [COUVREUR 1953: 287–288]。

24 MALZAHN 2010: 785: “The kausativum, on the other hand, has certainly the transitive meaning ‘delude, bewitch someone’ (e.g., in 109 a 10).”

25 この行は一角仙人説話の導入部であると考えられる [COUVREUR 1953: 288] が、一角仙人説話そのものは THT 109 には記述されていない。トカラ語文献の伝える一角仙人説話に関しては、TochSprR(B) II: 227–230 (THT 349–351) と PINAULT 2015 (PK NS 40) を参照。

26 補いは、“Viell. zu lantso(y) für lāntso(y) zu erg.” [TochSprR(B) II: 47, fn. 7 = ²TochSprR(B): 132, fn. 7] による。THT 349a4 も参照。

27 ṣaṇem に関しては、TochSprR(B) II: 47, fn. 8 = ²TochSprR(B): 132, fn. 8; 262 を参照。

28 補いは、TochSprR(B) II: 47, fn. 9 = ²TochSprR(B): 132, fn. 9 による。

pklyauss[o]²⁹

5 /// (kinna)re³⁰ prākre klāntsaññi • yaśaswiñi kinnarñā puwā(rā)s³¹ āksausa lä-
mau³²

6 /// po warkṣāltsa wāntalyi ite [pā]nnāte karṣṣa • sādhukeṃ kinnareṃ arañcā

7 /// lyakur akartte klyommont palsko sākāske tu ttu tārka-ñ kos ṣa

8 /// [o]tak ṣ pālkau-ne ce kca tu lekanma pikārānta ya --

9 /// (ra)[m]er³³ masa³⁴ ///

1 ……[仏陀は] ニャグローダーラーマ僧院³⁵ へ向かって行き始めた
(3.sg.)³⁶。ヤシヨーダラー王妃の

2 ……彼女の心の中に生じた(3.sg.)³⁷。[彼女は] バルコニーからまさに
自ら飛び降りた(←まさに自らを飛び落とした(3.sg.))。まさにこの
生において

29 Cf. MALZAHN 2010: 631–632.

30 補いは、TochSprR(B) II: 47, fn. 11 = ²TochSprR(B): 132, fn. 11 による。

31 補いは、TochSprR(B) II: 47, fn. 12 = ²TochSprR(B): 132, fn. 12 による。

32 TochSprR(B) II: 47, fn. 13 = ²TochSprR(B): 132, fn. 13: “Erg. zu *lämau(sa)* für *lmau(sa)*”

33 補いは、TochSprR(B) II: 47, fn. 16 = ²TochSprR(B): 132, fn. 16 による。

34 写真ではこの後に6文字書かれているのが見えるが、正確に読み取ることは難しい; cf. TochSprR(B) II: 47, fn. 17 = ²TochSprR(B): 132, fn. 17: “Rest unleserlich.”

35 Cf. THT 349a3: arhanteṣṣe kraupemba ṣesa nigrorām sañkr[ā](m)・「阿羅漢の集団ともどもニグローダーラーマ僧院 [へ]」。

36 omtsate に関しては、PEYROT 2008: § 3.1.5 (pp. 52–53) を参照。

37 sāl- に関しては、HILMARSSON 1990 を参照。Cf. 主語となる実体詞そのものは欠損しているが、IOL Toch 205 (H add. 149.83) a2: läkleṣṣe sasālau ñi arañcne 「苦しみに関するものが私の心の中に生じた」も参照。また、後述の SBhV を参考にすると、「望みのない状態 (nairāṣya-)」に相当する語が主語であると想定することも可能である。

- 3 ……[比丘たちが仏陀・] 先生に告げた (3.pl.): 「避難所 [と] 防護 [である者]³⁸ よ、ヤシヨーダラー王妃は十力を有する者 (仏陀)³⁹ に対する好意のゆえに
- 4 ……私のために [ヤシヨーダラーは生命を] 捨てた (3.sg.)。以前の時にも私への執着ゆえに生命を捨てた。そのことを君たちは聞きなさい。
- 5 ……キンナラは、ぐっすり眠っていた。ヤシャスヴィニ [という名の]⁴⁰ キンナラ女は⁴¹、火に向かって目覚めて座っていた
- 6 ……[王は] 全力で弓を一杯に張って [矢を] 放った (3.sg.)。善良なキンナラを心臓
- 7 ……度 (?), 近くに聖なる思考を [それらは] 残している / 留めている⁴²。君はまさしくその間 私を解放しなさい⁴⁴、……間
- 8 ……そして、まさにその時 (それをする時) 私は彼女を見よう⁴⁵。まさ

38 *saim-wāsta* は、仏陀に対して用いられる。Cf. THT 8a8: (ñāketmṣ) ñākte pudnāk(t)e *saim waste su* : *śrāvasti s(p)e māskītrā* 「神々の中の神である仏陀、避難所 [と] 防護である彼は、シュラーヴァステイーの近くにいた」。

39 *śika-maiyyaine* に関しては、PEYROT 2008: § 3.1.9 (pp. 57–58) を参照。さらに、BHSD s.v. *daśabala*: ‘possessing the ten bala, ep. and synonym of (any) Buddha’ も参照。

40 「ヤシャスヴィニ」という固有名詞ではなく、「名声を有する」などの意味の形容詞である可能性もある。

41 サンスクリット語に由来する語のトカラ語 B における女性形の形成方法に関しては、MALZAHN 2013 を参照。

42 *sākāske* は *sākāskem* (3.pl.) であると考えられる ; cf. ADAMS 2013, s.v. *sāk-*。後述の SBhV の文脈を参考にする、主語はキンナラに関して複数で表される何かである可能性が考えられる。

43 *tu ttu* は *tut tu* と分離して、そのうちの *tut* は後の *kos* と呼応する *tot* の誤写であると考えた : cf. TEB I § 279.1。

44 *tārka*³ の Imperative 2.sg.act.; cf. *ptārka*。

45 [o]tak は *ot* + *-k* からなる語である。トカラ語 B における *ot* … subjunctive に関し

しく何らかの諸々の手振り・身振り（→振る舞い）を……

9 ……迅速に行った (3.sg.)……

2. 根本説一切有部律の *Saṅghabhedavastu*

THT 109 の並行箇所であると考えられる根本説一切有部律の *Saṅghabhedavastu* の箇所は、SBhV II 36.17–41.21 と、それに対応するチベット訳 'Dul ba gzi [bKa' 'gyur, 'Dul ba; D Ņa 135b1–139a5, P Ce 130a1–133b2, S Ņa 181b4–187a2]、ならびに唐・義淨訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第十二 [大正藏 24, no. 1450, 160c8–162a27] である⁴⁶。以下に、THT 109 の並行箇所であ

ては PEYROT 2013: 374–376 を参照。

46 *Saṅghabhedavastu* のサンスクリット校訂本が出版されたのは 1977–1978 年のことであるので、WALDSCHMIDT が *Saṅghabhedavastu* のサンスクリット校訂本を利用することは不可能であった。一方、WALDSCHMIDT は *Catuspariṣatsūtra* の校訂に際して *Saṅghabhedavastu* のサンスクリット語写本資料を TUCCI から入手することができた [CPS III 221, 432–457] ののであるが、1957 年に出版された CPS II においてはその資料を利用していないので、WALDSCHMIDT がその資料を入手することができたのはおそらく 1957 年以降のことであったと考えられる。それに関して、WALDSCHMIDT 1967 (1960): 404, 注 33 も参照。さらに、WALDSCHMIDT が入手した *Saṅghabhedavastu* のサンスクリット語写本資料は、*Saṅghabhedavastu* のうちの CPS に対応する箇所のみであった (CPS III 221: “Auf meine Bitte machte Professor TUCCI mir die dem CPS entsprechenden Abschnitte dieses Textes freundlichst zugänglich”; “Übermittlung von Photographien der in Frage kommenden Blätter des Manuskriptes aus Gilgit”)。以上のことから、WALDSCHMIDT は、THT 109 を考察するにあたっては、*Saṅghabhedavastu* のチベット訳と漢訳のどちらか、あるいは両者を利用したのではないかと推定される。また、TUCCI 自身が *Saṅghabhedavastu* を含むギルギットからのサンスクリット語写本を入手したのが 1956 年のことであると報告されている [SFERRA 2008: 29, cf. SBhV I: XIV] ので、THT 109 に対する注記が公表された 1953 年の時点では TUCCI が入手することになる *Saṅghabhedavastu* のサンスクリット語写本が存在することすら知られていなかったと考えられる。なお、1950 年に出版された DUTT による校訂本の *Saṅghabhedavastu* (GilMs III 4.213–255) には当該箇所は存在しない。

と考えられうるサンスクリット語テキストとその和訳を提示する。なお、サンスクリット語テキスト、ならびにその和訳においてトカラ語断簡に対応する箇所は、トカラ語断簡の番号・面・行番号を左肩に付した上で、下線を引いて範囲を示し、さらに対応する語を太字にして明示する。

Saṅghabhedavastu MS⁴⁷ 438r7–440r7 ≈ SBhV II 36.17–41.21:

kiṃ +manyadhve¹⁾ bhikṣavo? yo 'sāv ekacoraka, aham eva sa tena kālena tena samaye[na]. yo 'sau tas[y]a putraḥ, eṣa eva sa Rāhula{h}s tena kā[l]e[na] ^(438r8) tena samay[e]na. tadā[p]y anena mālayā vijñāta, etarhy apy aham anena mo-[d]ak[e]na vijñāta. evaṃ hi vo bhikṣavo +cintyas²⁾ satvānām karmavipāka iti ka[r]-maparāyaṇair bhavitavyam* || ||.

Yaśo[dhar]ā saṃlakṣayati. y[a]dī Rāhulasya pitā antaḥp[u]raṃ pra^(438r9)viśati, tathaiiva so 'nucaritavyo yathā na bhūyo {n}nirgacchatīti. tata +ātmānam³⁾ ādau kṛtvā [G]opikāMṛgajāpramukhāni ṣaṣṭistrīsaḥ[s]r[r]āṇi +nānāvidhālamkārair⁴⁾ alamkṛtāni surabhimālya[dhūpava]strair vibhūṣitāny.

a[th]a bha[gavān] pūrvāhṇe [n]ivā^(438r10)[s]ya pātra[cīv]aram ādāya bhikṣugaṇaparivṛto bhikṣusaṃghapu(ra)skṛ[to] vin[e]yajanāp{{ai}}ekṣayā antaḥpuraṃ praviṣṭaḥ. tato YaśodharāMṛgajāGopikāpramukhāni ṣaṣ[ṭ]istrī[ṭ]-sahasrāṇi rūpayauvanavibhramāsākhe[d]āku[la]vi[la]si[taca]l[i]^(438v1)-taśīthilamekhalā{ka}lāpanisvanair +hasitamadhuragītamadhunetrabhrūvikārotkaṃpanapayodhara{dara}darśanāṅgavispaṣṭaceṣṭitair⁵⁾ bhāvaṃ darśayām āsu(r. a)tha bhagavata etad abhavat. saced bhokṣye, vaineyajanakālātikramo bhaviṣyaty. etā(s)striyaḥ kāmarāgābhibhūtā(s) [satyā]^(438v2)nām abhājanabhūtā bhaviṣyanty. {i-

47 ここでは *Saṅghabhedavastu* の写本のデジタル画像に基づいたサンスクリット語テキストを提示する。写本のデジタル画像は佛教大学の松田和信教授にご提供いただいた。松田教授のご厚意に感謝いたします。

[p]rtv} āśu prthagjanasya riddhir āvarjanakarī. ya(n) nv aham antaḥpuram rddhipratihāryeṇāvarjayeyam iti viditvā pūrvasyām diśy uparivihāyasam abhyudgama caturvidham tṛyāpatham kalpayati, tad yathā ca(m)kramyate tiṣṭhati niṣīdati śāyā[m] ^(438v3) kalpayati : tejodhātum api samāpadyate. tejodhātusamāpanna[s]ya buddhasya bhagavato vividhāny arcīṃṣi kāyā(n) niścāranti, tad yathā nīlāni pītāni lohītāny avadātāni mamjiṣṭhāni sphaṭikavarṇāni, yamakāny api prātihāryāni vi-[d]arśayaty. a_(438v4)dhahkāyaḥ prajvalaty, uparimāt kāyāc chītalā +vāridhārā(s)⁶⁾ sya(nda)nte, uparimaḥ prajvalaty, adhaḥkāyāc chī{ru}talā vāridhārā(s) syandante. yathā pūrvasyām diśy, evaṃ dakṣiṇāyām paścimāyām uttarasyām diśi iti caturdiśam caturvidham rddhiprātihāryam [v]i[darśya tā]n r(d)[dhya]_(438v5)-bhisamskārā(m) pratiprasrabhya purastād bhikṣusamghasya prajñapta evāsane ○ niṣaṇṇaḥ. atha tā(s) striyo bhagavata riddhiprātihāryam dṛṣṭvā +āvarjitā⁷⁾, mūlanikṛtā iva +drumā⁸⁾ bhagavataḥ +pādayor⁹⁾ nipaty{o}a purastā(n) niṣaṇṇā dharmāśraṇāyā. tato bha[gavat]ā tā_(438v6)[s]ām āśāyānuśayam dhātum prakṛtiṃ ca jñātvā tādrī caturāryasatyā ○ samprativedhikī dharmadeśanā kṛtā, yām śrutvā GopikāMṛgajāpramukhaiḥ ṣaṣṭiśrīśahasraiḥ srotaāpattiphalaṃ (sākṣātkṛtaṃ).

Yaśodharāyā atyarthaṃ kāmarāgābhībhūtāyā [sa]tya[darśanaṃ] _(438v7) na kṛtaṃ. tasyā etad abhavat. y{ā}a(n) nv aham bhagavantam rasatṛṣṇayā +anvā-○ varttayeyam¹⁰⁾ iti viditvā svayam eva bhagavato 'rthāya annapānaṃ sādhayitvā kathayaty. adyāhaṃ svahastaṃ bhagavantam sa{m}ntarpayāmtī. śrutvā bhikṣubhir bhagavata +ārocitaṃ.¹¹⁾ Yaśodharā bhadanta bhagavantam svahastaṃ rasatṛṣṇayā anvāvarttayitukāmeti |. bhagavān āha : pūrvam ahaṃ bhikṣavaḥ sarāgaḥ sadveṣaḥ samohaḥ rasapratisaṃvedī rasarāgapratisaṃvedī ca ||. etarhy ahaṃ vigatarāgo vigatadveṣo vigatamoho _(438v9) rasapratisaṃvedī no tu rasarāgapratisaṃvedī |. tat katham idānīm māṃ Yaśodharā rasatṛṣṇayā anvāvarttayatī || ||.

bhikṣavas saṃśayajātāḥ sarvasaṃśayacchettāraṃ buddhaṃ bhagavantaṃ
papracchuḥ. paśya bhadanta. Yaśodharā ⁺bhagavantaṃ¹²⁾ vaśīkaraṇamoda_(438v10)-
kenānvāvarttayitu {kā}m ārabdhā : ^[THT109r10]bhagavān āha || na bhikṣava etarhi
yathā atīte [']py adhvany **aham anayā modakenānvāvarttitas**. ta[c] chr[ū]yatām*
||.

bhūtapūrvaṃ bhikṣavo …⁴⁸ tadāpy a_(439v10)ha[m a]nayā rasatṛṣṇayā
anvāvarttita. etarhy (apy) ⁺eṣā¹³⁾ māṃ modakenānvāvarttayituṃ pravṛttā : || ||.

yadā bhagavān antaḥpurād bhuktvā ^[THT109v1]niṣkrāmati, tadā Yaśodharā ^[THT109v2]
nairāśyam āpannā, bhartu(s) snehavaimukhyāc **charaṇapṛṣṭham** abhiruhya
ātmā muktaḥ._(440r1) [asaṃ]mośadharmāṅ[o bu]ddhā bhagavantaḥ. [s]ā bhagavatā
ri(d)dhyā pratigrhītā |.

bhikṣa[v]aḥ saṃśayajātāḥ sarvasaṃśayacchettāraṃ buddhaṃ ^[THT109v3]
bhagavantaṃ papracchuḥ. paśya bhadanta. **Yaśodharāyā bhagavat[o] 'rthāya**
śaraṇapṛṣṭhād ātmā mukta iti. bhagavān āha |. na bhikṣava etarhi ^[THT109v4]
yathā¹⁴⁾ite [']py adhvany a_(440r2)[na]yā ⁺mamārthāyātā¹⁴⁾ **pa[r]ityak[t]a[s. tac]**
chr[ū]yatām* ||.

bh[ū]tapūrva[m] bhikṣavo vārāṇa[s]y[ā]m [nagaryā]m brahmadatto nāma rājā
babhūva : so 'pareṇa samay[e]na mṛgavadhāya nirgato. 'nupūrveṇa
parvatakandaraṃ praviṣṭaḥ. tena tatra kinnaraḥ kinnarī ca dṛiṣṭā. ^[THT109v5]**kinnaraḥ**
suptaḥ, kinnarī jāgarti._(440r3) rājñā ā karṇā(d) ^[THT109v6]**dhanuḥ pūrayitvā**
kinnaraḥ śareṇa **marmaṇi** tāḍitaḥ, prāṇair viyuktaḥ. rājñā kinnarī grhītā
bhāryārthāya | rājā ⁺tām¹⁵⁾ ādāya samprasthitaḥ. sā kathayati. deva tiṣṭhatu. ^[THT109v7]
tāvad anujānīhi **mā(m) yā{h}vad** asya kinnarasya śarīrapūjāṃ kariṣyāmi |.

48 *Saṅghabhedavastu* MS 438v10–439v10 (≈ SBhV II 38.2–40.18) には一角仙人説話が語られているが、THT 109 には一角仙人説話そのものは述べられていないと考えられるので、ここでは省略する。前注 25 を参照。

rā{ {sa} }jā saṃlā_(440r4)kṣayati. kva gamiṣyati. ^[THT109v8]**paśyāmi** [tāvat]. ka[tham
a]s[y]a [śar]īrap[ū]jām karo ○ tīti. sã tena samanujñātã |. tatas tayã tam kinnaram
kãṣṭhair avaṣṭabhya citãṃ prajvãlyãtmã prakṣiptaḥ. devatã gãthã(m) bhãṣate ||.

anyathã cintitã hy arthã anyathã parivarttitãḥ

kinnarī(m) rama { {ma} }_(440r5)yāmīti kṛtam prāṇi[vadhadvã]yam iti ||
ki(m) manyadhve bhikṣavo? ^{†yo¹⁶⁾} 'sau ○ kinnara a { {me} }ham eva sa tena
kãlena (tena) samayena. ^{†yãsau¹⁷⁾} kinnarī ^{†eṣaiva¹⁸⁾} sã Yaśodharã. tadãpy anyã
^{†mamãrthãyãtmã¹⁹⁾} citãyã(m) muktaḥ. etarhy a[py] anyã ^{†mamãrthãyãt[m]ã²⁰⁾}
[ś]araṇapr_(440r6)[śthã]n mukta iti || ||.

bhagavã[n sa]ṃlakṣayati. idãññ Yaśodha ○ rãyã prãpto vinayakãlo. ⁽²¹⁾yan ^{†nv}
^{†aham enãṃ²¹⁾} saṃsãrakãntãrãd u[t]tãrayeyam iti viditvã ta[s]yã(h) tãdṛṣī ^{†caturãr-}
yasatyasaṃprativedhikī²²⁾ dharmadeśanã kṛtã, yãṃ ^[THT109r9]**śrutvã** Yaśo_(440r7)-
dharayã viṃṣãtiṣi[kharasamud]gataṃ satkãyadṛṣṭiṣ[ai]lam [j]ñ[ãnava]jreṇa
bhit(t)vã srotaãpattiphalam sãkṣãtkṛtam* ||. sã samyag eva śraddhayã
agãrãd anagãrikãṃ pravrajitã yãvad a[r]hantinī saṃvṛtã ||.

1) MS manyãṣve. 2) MS 'dityas. Cf. Tib. *bsam gyis mi khyab pa*. 3) MS *ãtmanãm*. 4) MS *nãnãvidhaikãrãir*. 5) MS *netrabhravi*. 6) MS *varidhãrã*. 7) MS *ãvarjita*. 8) MS *dramã*.
9) MS *pãdayon*. 10) MS *anvãvarttayeyem*. 11) MS *ãrocaya[nt]i*_(438v8) *taṃ*. 12) MS
bhagavãn. 13) MS *eṣa*. 14) MS *ãtma*. 15) MS *taṃ*. 16) MS *yã*. 17) MS *y[ã] s[ã]*. 18) MS
eṣaivã. 19) MS *rthãyãtmã*. 20) MS *rthãyãtmã*. 21) MS *yan maya-m-enãm*. 22) MS
cattrarãrya°.

「比丘たちよ、君たちはどう考えるか？ あの一人の盗人、その者が、
その時、その際における他ならぬ私であった。彼のあの息子、その者が、
その時、_(438r8) その際における他ならぬ当の者、ラーフラであった。その時
にも [私は] この者によって花環を携えて識別され、今も私はこの者によ
って糖菓を携えて識別された。このように、比丘たちよ、衆生たちの行為

の異熟は思慮されえないので、君たちは行為の最終的な行き先を把握する者たちになるべきである」。

ヤシヨーダラーは考えた：「もしラーフラの父（仏陀）が後宮へ^(438r9)入るならば、彼がもう二度と出て行かないようにそのようにつくされるべきである」。それから、自分を筆頭にして、ゴーピカー、ムリガジャーを始めとした6万人の女性が種々なる種類の装飾品によって装飾され、諸々のよい香りの花環と諸々の薫香のついた衣服⁴⁹によって飾り立てられた。

次に、世尊は午前中に^(438r10)着衣し、鉢と衣を取ったのちに、比丘の集団に取り囲まれ、比丘の集まりによって先頭に置かれ、教導されるべき人々を目指して後宮へ入った。それから、ヤシヨーダラー、ムリガジャー、ゴーピカーを始めとした6万人の女性が美貌と若さ、なまめかしさ、願望と気だるさに満ちた戯れ、^(438v1)動き、緩い帯紐とおしゃべりする声によって、笑い甘い歌、愛らしい眼と眉毛の変化と揺れ動き、乳房を見せること、肢体を見え隠れして動かすことによって、[女性的な]性質（女性性）を見せた。それから、世尊に次のことが生じた：「もし私が食事をするならば、教導されるべき人々のための適切な時が過ぎ去ることになるであろう。これらの女性たちは欲望の諸対象に対する激情によって支配されているので、^(438v2)諸々の真実にとっての真の器とはならないであろう。神通力（実現力）は、迅速に凡夫を[自分の]方へねじり向けるようにするものである。さあ、私は後宮[の人々]を神通力による神変によって[自分の]方へねじり向けるならば、[どうであろうか]？」と。この

49 surabhimālyadhūpavastrair の内の dhūpavastra- に関しては、“Insbesondere gibt es manche Fälle, wo die Wiedergabe durch eine einfache Kasusform unmöglich wäre und das Vorderglied überhaupt etwas für den Hintergliedsbegriff Charakteristisches, ihn Unterscheidendes gibt z.B. *daśā-pavitrā-* „ein mit Fransen versehenes Sehtuch“” [AiG II, 1, § 98c (p. 244)] 参照。

ように知ったのちに、東の方角において上空へ上って、四種の威儀を整えた—すなわち、繰り返す歩む、立つ、座る、^(438v3)横になる（←横になることを整える）—。[世尊は] 火界 [定] へも入った。火界 [定] へ入った仏陀・世尊の身体から様々な—すなわち、青黒い、黄色い、赤い、白い、緋色の、水晶色の—諸々の光線が進み出る。複数の一対の神変も [世尊は] くっきり示した。^(438v4) 下半身は燃え、上半身から冷たい水の流りが逆った。上半身は燃え、下半身から冷たい水の流りが逆った。東の方角におけるように、そのように南、西、北の方角においてというように、四方に神通力による四種の神変を [世尊は] くっきり示したのちに、神通力による^(438v5) それらの [神変を] 組み立てることをそれぞれ解いて、比丘僧団の前にまさに設えられた座に座った。それから、それらの女性たちは、世尊の神通力による神変を見たのちに、[世尊の] 方へねじり向けられ、根のところまで切り倒された⁵⁰ 樹々のように、世尊の両足のところに倒れ落ちたのちに、教えを聞くために [世尊の] 前に座った。それから、^(438v6) 彼女たちの傾向・潜在的な傾向と [心の] 要素（性向）、性質を理解したのちに、世尊によって聖なる者たちの四つの真実を貫通する／に通達するそのような教えの説示が為された、それ（教えの説示）を聞いたのちにゴーピカー、ムリガジャーを始めとした6万人の女性たちによって預流果が知覚されたところの。

欲望の諸対象に対する激情に甚だしく支配されていたヤショーダラーによって真実を見る（理解する）ことは^(438v7) 為されなかった。彼女に次のことが生じた：「さあ、私は世尊を味に対する渴望によって振り向かせるならば、[どうであろうか]？」と。このように察して、まさに自ら世尊

50 °nikṛttā と読んだが°nikṛntā [cf. SBhV II 37.14] と読むことも可能である。BHSD s.v. nikṛnta も参照。なお、ttā の文字の上に訂正記号のようなものが見えるが、訂正記号とはみなさない。

のために食物・飲物を完成させた（用意した）のちに、語った：「今日、私は自らの手で世尊を満足させよう」と。比丘たちによって聞かれたのちに、世尊に^(438v8)告げられた：「御身よ、ヤシヨーダラーは、世尊を自らの手で味に対する渴望によって振り向かせたいという願望を抱いている」と。世尊は言った：「比丘たちよ、かつて私は激情を有し、憎しみを有し、迷妄を有していたので、味を感受し、味に対する激情を感受していた。[しかし]今は、私は激情を離れ、憎しみを離れ、迷妄を離れているので、^(438v9)味を感受するが味に対する激情を感受しない。そうであるのに、どのようにして今、私をヤシヨーダラーは味に対する渴望によって振り向かせるのか？」と。

疑いを生じた比丘たちは、あらゆる疑いを断ち切る者である仏陀・世尊に尋ねた：「御身よ、見なさい。ヤシヨーダラーは、世尊を支配的な（強力な）^(438v10)糖菓によって振り向かせようとし始めた」。^[THT 109a10]世尊は言った：「比丘たちよ、過去時においても私がこの女性によって糖菓によって振り向かせられたように、[彼女が私を振り向かせようとしたのは]今[だけ]ではない。そのことが聞かれなさい。

比丘たちよ、往古の以前に、……（一角仙人の説話）……その時にも^(439v10)私はこの女性によって味に対する渴望によって振り向かせられた。今も、当の女性は私を糖菓によって振り向かせるよう活動した」。

世尊が食事をしたのちに後宮から^[THT 109b1]出て行く時、その時ヤシヨーダラーは^[THT 109b2]望みのない状態に陥った。夫の愛情がそっぽを向いているので、屋根のひさしの後背部／上部へ上った後に、自らを放った（←自らが放たれた）。^(440r1)仏陀たち、世尊たちは失念することのない性質を有する。彼女は世尊によって神通力でもって受け取られた。

疑いを生じた比丘たちは、あらゆる疑いを断ち切る者である仏陀・^[THT 109b3]世尊に尋ねた：「御身よ、見なさい。ヤシヨーダラーは、世尊のため

に屋根のひさしの後背部／上部から自らを放った」と。世尊は言った：
「比丘たちよ、^[THT 109b4] 過去時においても_(440r2) この女性は私のために自ら
を放棄したように、彼女が自らを放棄したのは 今 [だけ] ではない。
そのことが聞かれなさい。

比丘たちよ、往古の以前に、ヴァーラーナシー都市においてブラフマ
ダッタという名の王が現われた。彼はある別の時に野生獣（鹿）の殺害
（狩猟）に出かけた。そうこうするうちに山の洞穴へ入った。彼によって
そこでキンナラとキンナラ女が見られた。^[THT 109b5] キンナラは眠ってい
た、キンナラ女は目覚めていた。_(440r3) 王によって^[THT 109b6] 耳まで弓 [の
弦] が引かれたのちに、キンナラが矢で急所のところを撃たれ、諸々の生
気から離れた。王によってキンナラ女は [自分の] 妻とするために捕らえ
られた。王は彼女を連れて出発した。彼女は語った：『王よ、立ち止まっ
てください。このキンナラの遺体供養を私が為す^[THT 109b7] 間、その間私を
許しなさい（自由にしなさい）』と。王は_(440r4) 思慮した：『彼女はどこ
へ行くつもりであろうか？^[THT 109b8] 暫し私は見よう。どのように [彼女
が] 彼の遺体供養を為すのか？』と。彼女は彼によって許された。それか
ら彼女はそのキンナラを諸々の薪で下支えしたのちに、[薪の] 堆積物を
燃やして、自らを投げた。神格が偈を語った。

諸々の物事が別様に考えられ、別様に展開された（諸々の物事が考え
られたのとは異なって展開された）。

「私はキンナラ女を_(440r5) 楽しませよう」と [思っ] 二つの殺生が為
された、と。

比丘たちよ、君たちはどう考えるか？ あのキンナラ、それが、その
時、その際における他ならぬ私であった。あのキンナラ女、それが他なら
ぬ当の女性、ヤショーダラーであった。その時にもこの女性は私のために
自らを [薪の] 堆積物の上に放った。今もこの女性は私のために自らを屋

根のひさしの^(440r6)後背部／上部から放った」と。

世尊は思慮した：「今、ヤシヨーダラーを教導する時が到った。さあ、私が彼女を輪廻の原野から救い出すならば、[どうだろうか?]」と。このように察したのちに、彼女に聖なる者たちの四つの真実に通達するそのような教えの説示が為された、それを^[THT 109b9]聞いたのちに^(440r7)ヤシヨーダラーによって20の頂において突き出た有身見の岩山が金剛のような智によって砕かれたのちに、預流果が知覚されたところの。彼女はまさに正しく信によって家から家のない状態へ進み出た、乃至、阿羅漢女になった。

3. THT 109 と *Saṅghabhedavastu* における並行箇所との比較

THT 109 とそれに関連する *Saṅghabhedavastu* の並行箇所を提示したので、ここではその両者を比較して検討する。

THT 109a3 は a2 にある「仏陀・先生は言った」ということの内容であると考えられる。これは *Saṅghabhedavastu* MS 438r7-8 に関連するものであると考えられるが、語句は一致していない。THT 109a4-5 は、飲食物などを用意したのちにヤシヨーダラーが身支度をして着飾ることを描写している場面であると考えられる。*Saṅghabhedavastu* MS 438r9 もヤシヨーダラーを始めとした女性たちが着飾ることを記述している。また、438v1 において仏陀が「もし私が食事をするならば」と語っているので、明記されていないが、この438v1より前の場面において食事も用意されていたと考えられる。しかし、ここでも THT 109a4-5 と *Saṅghabhedavastu* MS 438r9 において語句が一致するのではない。THT 109a6 においてヤシヨーダラーは仏陀と行動を共にしていると考えられる。ラーフラを見に行くということを口実にして仏陀に会いに行き、a7 において仏陀にアンジャリをしたのちに仏陀の両足に挨拶をし、a8 において僧団ともども仏陀に行かないをなしたことが描写されていると考えられるが、*Saṅghabhedavastu* には対応する記述を見出すことはできない。また、THT

109a9においては預流に達したことが記述されていて、その動詞は三人称単数で表されているので、おそらくヤシヨーダラーが主語であると考えられるが、定かではない。一方、*Saṅghabhedavastu* MS 440r7においてヤシヨーダラーが預流果を得たということは記述されているが、その位置が大きく異なっている。一方、THT 109a10に記述されるヤシヨーダラーの甘味による誘惑は、*Saṅghabhedavastu* MS 438v10においても記述されている。

THT 109b1は、ブツダがヤシヨーダラー王妃に誘惑されることなく、ヤシヨーダラー王妃を顧みずに僧院へ去り始めたことを描写している場面であると考えられる。これは、*Saṅghabhedavastu* MS 439v10において仏陀が後宮から出て行く記述に関連していると考えられる。THT 109b2では仏陀を後宮に引き留めることに失敗したヤシヨーダラーが悲嘆して投身自殺を図っているが、これは*Saṅghabhedavastu* MS 439v10と関連する⁵¹。THT 109b3ではヤシヨーダラーが仏陀への愛情のために投身自殺を図ったことに関して比丘たちが仏陀と語る（仏陀に尋ねる）場面であると考えられる。これは、*Saṅghabhedavastu* MS 440r1と関連する。THT 109b4は仏陀の発言であると考えられる。この場面は、ヤシヨーダラーが生命を捨てたのは今現在だけではなく以前にも生命を捨てたことがあったということを述べ、b5-9の説話の導入部として機能している。これは、*Saṅghabhedavastu* MS 440r1-2に対応する。THT 109b5は、眠っているキンナラと目覚めているキンナラ女の描写であり、*Saṅghabhedavastu* MS 440r2に対応する。THT 109b6は、王がキンナラを弓で射殺する場面であると考えられ、*Saṅghabhedavastu* MS 440r3に対応する。THT 109b7は、キンナラ女の発言であると考えられる。その発言内容は、射殺されたキンナラに関する何かが思考（思念）を残しているので、それを供養するあいだ自分を解放するように王に懇願していると考えられる。これは、*Saṅghabhedavastu* MS 440r3に関連

51 THT 109b2の表現としては、*Saṅghabhedavastu* MS 440r1, 5-6の「屋根のひさしの後背部／上部から自らを放った」の方がより近い。

する。THT 109b8 は王の思考内容であり、キンナラ女がどのように行動するのかを見ようというものであると考えられる。これは、*Saṅghabhedavastu* MS 440r4 に関連する。THT 109b9 は、キンナラ女が素速く動いて火に飛び込んで自殺を行なったことを描写している可能性が考えられるが、定かではない。

以上のとおり、THT 109 は *Saṅghabhedavastu* と完全に一致するのではないが、*Saṅghabhedavastu* MS 438r7–440r7 は THT 109 を理解するために重要な資料である。とりわけ THT 109a10–b9 に関して *Saṅghabhedavastu* の並行箇所は参考になる。

4. THT 109 に関連する *Saṅghabhedavastu* 以外の資料

Saṅghabhedavastu MS 438r7–440r7 が THT 109 を理解するために重要であるとはいえ、THT 109 は *Saṅghabhedavastu* MS 438r7–440r7 と完全に一致するのではないので、THT 109 を理解するために *Saṅghabhedavastu* MS 438r7–440r7 よりも有効な資料が存在するのかどうかを検討する必要がある。

そこで、THT 109 に描写されているとみなしうる三つの要素に関して検討する。三つの要素とは、(1) ヤショーダラーが仏陀を甘味によって誘惑したこと (THT 109a10) と (2) ヤショーダラーの投身自殺 (THT 109b2–4)、ならびに (3) それに関連するキンナラとキンナラ女の説話 (THT 109b5–9) である。以下、(1)、(2)、(3) を順に吟味する。

(1) のヤショーダラの甘味による誘惑を記述しているのは、*Mahāvastu* の二箇所 [Mvu (n.e.) III 175.14–176.6, 348.1–349.5 (cf. Mvu III 143.2–10, 271.14–272.17)] と姚秦・鳩摩羅什訳『大智度論』卷第十七 [大正藏 25, no. 1509,

183a1-15]である。Mahāvastu⁵²も『大智度論』⁵³もヤシヨーダラーの甘味による誘惑を記述している⁵⁴。

次に、(2)ヤシヨーダラーの投身自殺に関しては、*Saṅghabhedavastu* 以外に見出すことができない。

続いて、(3)キンナラとキンナラ女の説話に関しては、*Mahāvastu* [Mvu (n.e.) II 131.5-150.26 (Mvu II 94.15-114.22)] と *Jātaka* [Ja IV 282.16-288.23 (no. 485), cf. Ja I 91.9 = GAFFNEY 2018-2019: vol. I 174.16-17] に記述がある。しかし、*Mahāvastu* においてはキンナラ女に夫であるキンナラが存在するという設定はとられていないので、キンナラが射られるという描写も存在しない。一方、*Jātaka* においてはキンナラ女に夫であるキンナラがいるが、射られる際にそのキンナラは眠っているのではなく歌っている⁵⁵。また、THT 109において(3)は(2)と関連しているので、ヤシヨーダラーが過去にも生命を捨てたことがある

52 Mvu (n.e.) III 176.4-5 (cf. Mvu III 143.8-9):

bhagavān āha “na bhikṣavo etarahi yeva eṣā Yaśodharā mama modakehi lobheti, anyadāpi eṣā mama modakehi lobheti”.

世尊は言う：「比丘たちよ、当のヤシヨーダラーが私を糖菓で誘惑する（誘惑した）のは今だけではない。他の時にも当の女性は私を糖菓で誘惑する（誘惑した）」。

Mvu (n.e.) III 349.3-5 (cf. Mvu III 272.15-17):

bhagavān āha “(na) bhikṣava etarahiṃ yeva, anyadāpi eṣā Yaśodharā sarvāṅkāravibhūṣitā ātmānam alaṃkṛtvā pariviśati pralobheti ca”.

世尊は言う：「比丘たちよ、あらゆる装飾品で飾り立てられた当のヤシヨーダラーが自らを装飾したのちに、[私に] 給仕し [糖菓で私を] 誘惑するのは、今だけではなく他の時にもである」。

53 「此耶輸陀羅、非但今世以歡喜丸惑我、乃往過去世時亦以歡喜丸惑我。」[大正藏 25, 183a13-15].

54 ただし、ヤシヨーダラーの甘味による誘惑に至るプロットは *Mahāvastu* と『大智度論』で異なる。そのプロットに関して *Mahāvastu* は *Saṅghabhedavastu* に近いが、『大智度論』は *Saṅghabhedavastu* とは異なっている

55 Ja IV 284.1-2. さらに、そのキンナラは射られるが、死んではいない。

ために (3) の説話が語られる [THT 109b4] が、*Mahāvastu* においても⁵⁶ *Jātaka* においても⁵⁷ この説話を語る目的が異なっている。

以上の三つの要素の検討から、現在利用しうる資料の中では *Saṅghabhedavastu* が THT 109 にとって最も参考になる資料であると言えることができる。

まとめ

以上の考察により、THT 109 は *Saṅghabhedavastu* と完全に一致するのではないものの、TochSprR(B) II: 46 =²TochSprR(B): 131 が適切に指摘するように⁵⁸、THT 109 における文脈を理解するためには根本説一切有部律の *Saṅghabhedavastu* が最重要の資料である⁵⁹。とりわけ THT109a9–b9 に関して、*Saṅghabhedavastu* MS 438v10, 439v10–440r7 は参考になる。また、今後 THT 109 に関連する他のトカラ語断簡が発見あるいは確認された場合に⁶⁰、*Saṅghabhedavastu* MS 438r7–440r7

56 Mvu (n.e.) II 131.5–7 (= Mvu II 94.15–17):

bhagavān āha “na bhikṣavo idāniṃ yeva Yaśodharā khedena labdhā. anyadāpi eṣā mayā mahatā khedena mahatā śrameṇa mahatā vīryeṇa labdhā”.

世尊は言う：「比丘たちよ、ヤショードラーが〔私によって〕疲労するほどのことによって得られたのは今だけではない。他の時にも当の女性は私によって大いに疲労することによって大なる努力によって大なる勇敢さによって得られた」。

57 Ja IV 288.20–21: na idān' eva pubbe p' eṣā mayi asaṃhīracittā anaññaneyyā yevā.

当の女性が私に対して揺るぎない心を有する（貞淑な）者でありまさに他の〔男〕によって連れて行かれえないのは、今だけではなく以前にもである。

58 この点に関する WALDSCHMIDT の功績は明らかであるが、彼の学術的な貢献をまとめた比較的最近のものとして SANDER 2004 がある。

59 トカラ語文献における根本説一切有部律の影響は、OGIHARA 2015 を参照。また、荻原 2016 も参照。

60 CEToM は THT 109 に関して「進行中の作業 (work in progress)」を表す赤字で “Remarks Cf. also m-tht1575a–THT 1576.h.” と注記している (<https://www.univie.ac.at/>)

は利用されるべき貴重な資料となることも例証されたといえよう。

略号

- 大正蔵 高楠順次郎・渡辺海旭（編）『大正新脩大藏經』100巻。東京：大正一切経刊行会，1924–1932.
- AiG II, ¹ WACKERNAGEL, Jakob & Albrecht DEBRUNNER, *Altindische Grammatik*, II, ¹: Einleitung zur Wortlehre. Nominalkomposition. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, ²1957.
- Arthav *The Arthaviniścaya-sūtra & Its Commentary (Nibandhana)*. Ed. N. H. SAMTANI. Tibetan Sanskrit Works Series, 13. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1971.
- Avś *Avadānaśataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna*. Ed. J. S. SPEYER. 2 volumes. Bibliotheca Buddhica, 3. St.-Petersbourg: Commissaires de l'Académie Impériale des Sciences, 1906–1909
- BHSD EDGERTON, Franklin. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. Volume II: Dictionary. New Haven, CT: Yale University Press, 1953.
- CEToM A Comprehensive Edition of Tocharian Manuscript. (<https://www.univie.tocharian/?m-tht109>)

tocharian/?m-tht109) ので、これら THT 1575 と 1576 が THT 109 に関連する可能性がある。しかし、TITUS 上で公開されているテキストと写真を利用して THT 1575 と 1576 を簡略にはあるが読んだ限りでは、これらの断簡が THT 109 のテキスト内容と関連するようには思われない。THT 1575 と 1576 が THT 109 の内容に関連するにせよ関連しないにせよ、これらの断簡の詳細な研究がまたれるところである。なお、THT 1575 と 1576 のうちの幾つかの断簡は、別の番号を付与されて、すでにテキストが公表されている：THT 1575.c は THT 115、THT 1576.a は THT 111、THT 1576.b は THT 116、THT 1576.c は THT 112、THT 1576.d は THT 114、THT 1576.h は THT 113、そして THT 1576.f の a 面は THT 116 である [TochSprR(B) II: 48–51 = ²TochSprR(B): 133–136, 263–264; cf. SCHAEFER 2013: 328]。

- ac.at/tocharian/)
- CPS *Das Catuspariśatsūtra: Eine kanonische Lehrschrift über die Begründung der buddhistischen Gemeinde*. Ed. Ernst WALDSCHMIDT. Teil I–III. Abhandlungen der deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1952 Nr. 2, 1956 Nr. 1, 1960 Nr. 1. Berlin: Akademie-Verlag, 1952, 1957, 1962.
- D Derge 版
- GilMs *Gilgit Manuscripts*. Ed. NALINAKSHA DUTT. Volume III.1, Delhi: Sri Satguru Publications, ²1984 [Srinagar: Calcutta Oriental Press, ¹1947]; Volume III.4, Calcutta: Calcutta Oriental Press, 1950.
- GMNAI 1 *Vinaya Texts*. Ed. Shayne CLARKE. Gilgit Manuscripts in the National Archives of India, Facsimile Edition, 1. New Delhi: The National Archives of India/Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2014
- IOL Toch PEYROT, Michaël. *An Edition of the Tocharian Fragments IOL Toch 1 – IOL Toch 822 in the India Office Library, London*. 2007. (http://idp.bl.uk/database/oo_cat.a4d?shortref=Peyrot_2007;random=25619)
- Ja *The Jātaka, Together with Its Commentary; Being Tales of the Anterior Birth of Gotama Buddha*. Ed. V. FAUSBØL. Volume IV. London: Trübner, 1887.
- Mvu *Mahāvastu Avadānaṃ. Le Mahāvastu*. Ed. É. SENART. 3 volumes. Société asiatique, Collection d'ouvrages orientaux, seconde série. Paris: Imprimerie nationale, 1882–1897.
- Mvu (n.e.) *The Mahāvastu. A New Edition*. Ed. Katarzyna MARCINIAK. Bibliotheca philologica et philosophica Buddhica, 14.1–2. Tokyo: International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2019–2020.
- P Peking 版
- PK NS Pelliot Koutchéen Nouvelle Série

- S Stog Palace 写本
- SBhV *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*. Ed. Raniero GNOLI, Rome 1977–1978.
- TEB I KRAUSE, Wolfgang & Werner THOMAS, *Tocharisches Elementarbuch*, Band I: Grammatik, Heidelberg: Carl Winter, 1960.
- THT Tocharische Handschriften aus den Turfanfunden
- TITUS Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien. Tocharian Manuscripts from the Berlin Turfan Collection. Edited by Jost Gippert, Katharina Kupfer, Christiane Schaefer & Tatsushi Tamai. (<http://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/texte/tocharic/tht.htm>)
- TochSprR(B) II *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Im Auftrag der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin herausgegeben von †E. Sieg und †W. Siegling. Heft 2: Fragmente Nr. 71–633*. Aus dem Nachlaß herausgegeben von Werner THOMAS. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1953.
- ²TochSprR(B) *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Teil I: Die Texte. Band 1: Fragmente Nr. 1–116 der Berliner Sammlung*. Herausgegeben von E. SIEG[†] und W. SIEGLING[†], neubearbeitet und mit einem Kommentar nebst Register versehen von Werner THOMAS. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch-historische Klasse, Dritte Folge, 155. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1983.

参考文献

- 萩原裕敏 2013 「阿含經典に関連する三点のトカラ語 B 断片について」『東京大学言語学論集』第34号 (eTULIP): e1–e33.
——— 2016 「『根本説一切有部律薬事』に関連する二点のトカラ語 B 断片について

- て」荒川正晴・柴田幹夫（編）『シルクロードと近代日本の邂逅 西域古代資料と日本近代仏教』勉誠出版：258–276.
- ADAMS, Douglas Q. 2013. *A Dictionary of Tocharian B. Revised and Greatly Enlarged*. Leiden Studies in Indo-European, 10. Amsterdam/New York: Rodopi.
- COUVREUR, Walter. 1953. “Het leven van de Boeddha volgens de Tochaarse bronnen.” In *Handelingen van het Twintigste Vlaams Filologencongres: Antwerpen 7–9 April 1953*: 275–291.
- FELLNER, Hannes A., Bernhard KOLLER & Martin BRAUN. 2019. “Digital Approaches to the Linguistic and Paleographic History of Tocharian B.” In *Proceedings of the 30th Annual UCLA Indo-European Conference*. Ed. D. M. GOLDSTEIN, S. W. JAMISON & B. VINE.: 61–76. Bremen: Hempen.
- GAFFNEY, Sean. 2018–2019. *sKyes pa rabs kyi gleñ gzi: Jātakanidāna*. 2 volumes. North Canterbury: Indica et Buddhica.
- HACKSTEIN, Olav. 1995. *Untersuchungen zu den sigmatischen Präsenstambildungen des Tocharischen*. Historische Sprachforschung (Historical Linguistics), 38. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- HACKSTEIN, Olav, Hiromi HABATA & Christoph BROSS. 2019. *Tocharische Texte zur Buddhalegende*. Münchener Studien zur Sprachwissenschaft, Beiheft 27. Dettelbach: Verlag J.H. Röhl.
- HILMARSSON, Jörundur. 1990. “The Verb *säl-* in Tocharian.” *Tocharian and Indo-European Studies* 4: 87–118.
- KIM, Ronald I. 2018. *The Dual in Tocharian: From Typology to Auslautgesetz*. Münchener Studien zur Sprachwissenschaft, Beiheft 26. Dettelbach: Verlag J.H. Röhl.
- MALZAHN, Melanie. 2007. “The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language.” In *Instrumenta Tocharica*, ed. M. MALZAHN: 255–297. Heidelberg: Winter.
- . 2010. *The Tocharian Verbal System*. Brill’s Studies in Indo-European Languages & Linguistics, 3. Leiden/Boston: Brill.
- . 2013. “Of Demons and Women — TB *yakṣa-* and Oppositional Feminine Forms in Tocharian.” *Tocharian and Indo-European Studies* 14: 105–121.
- OGIHARA, Hirotooshi. 2011. “Notes on Some Tocharian Vinaya Fragments in the London and Paris Collection.” *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 111–144.
- . 2012. “A Fragment of the *Bhikṣu-prātimokṣasūtra* in Tocharian B.” *Tocharian and Indo-European Studies* 13: 163–179.

- . 2013. “Tocharian Vinaya Texts in the Paris Collection.” *Tocharian and Indo-European Studies* 14: 187–211.
- . 2015. “The Transmission of Buddhist Texts to Tocharian Buddhism.” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38: 295–312.
- PEYROT, Michaël. 2008. *Variation and Change in Tocharian B*. Leiden Studies in Indo-European, 15. Amsterdam/New York: Rodopi.
- . 2013. *The Tocharian Subjunctive: A Study in Syntax and Verbal Stem Formation*. Brill’s Studies in Indo-European Languages and Linguistics, 8. Leiden/Boston: Brill.
- PINAULT, Georges-Jean. 1984. “Un fragment du *Vinayavibhaṅga* en Koutchéen.” *Journal Asiatique* 272: 369–393.
- . 1989. “Une version koutchéenne de l’*Aggañña-sutta*.” *Tocharian and Indo-European Studies* 3: 149–220.
- . 2008. *Chrestomathie tokharienne: textes et grammaire*. Leuven/Paris: Peeters.
- . 2015. “The Legend of the Unicorn in the Tocharian Version.” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 38: 191–222.
- SANDER, Lore. 2004. “Ernst Waldschmidt’s Contribution to the Study of the ‘Turfan Finds.’” In *Turfan Revisited - The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, ed. D. DURKIN-MEISTERERNST, S.-Ch. RASCHMANN, J. WILKENS, M. YALDIZ & P. ZIEME: 303–309. Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie, 17. Berlin: Dietrich Reimer.
- . 2013. “Was kann die Paläographie zur Datierung tocharischer Handschriften beitragen?” In *Silk Road Studies 17: Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit: Symposium anlässlich des 100. Jahrestages der Entzifferung des Tocharischen Berlin, 3. und 4. April 2008*, ed. Y. KASAI, A. YAKUP & D. DURKIN-MEISTERERNST: 277–324. Turnhout: Brepols.
- SCHAEFER, Christiane. 2013. “Zur Katalogisierung der tocharischen Handschriften der Berliner Turfansammlung.” In *Silk Road Studies 17: Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit: Symposium anlässlich des 100. Jahrestages der Entzifferung des Tocharischen Berlin, 3. und 4. April 2008*, ed. Y. KASAI, A. YAKUP & D. DURKIN-MEISTERERNST: 325–348. Turnhout: Brepols.
- SCHMIDT, Klaus T. 2006. “THT 1539.” In *Jaina-itihāsa-ratna: Festschrift für Gustav Roth zum 90. Geburtstag*, ed. U. HÜSKEN, P. KIEFFER-PÜLZ & A. PETERS: 461–466. Indica et Tibetica, 47. Marburg: Indica et Tibetia Verlag.
- . 2008. “THT 107 ‘Die Speisung des Bodhisattva vor der Erleuchtung’”. Die west-

- tocharische Version im Vergleich mit der Sanskritfassung der Mūlasarvāstivāḍins.” In *Silk Road Studies 16: Aspects of Research into Central Asian Buddhism: In Memoriam Kōgi Kudara*, ed. P. ZIEME: 309–342. Turnhout: Brepols.
- SFERRA, Francesco. 2008. “Sanskrit Manuscripts and Photographs of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci’s Collection.” In *Sanskrit Texts from Giuseppe Tucci’s Collection*, Part I, ed. F. SFERRA: 15–78. *Manuscripta Buddhica*, 1; Serie Orientale Roma, 104. Roma: Istituto Italiano per l’Africa e l’Oriente.
- TAMAI, Tatsushi. 2011. *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, 138. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen.
- WALDSCHMIDT, Ernst. 1967 (1960). “Die Erleuchtung des Buddha.” In *Von Ceylon bis Turfan: Schriften zur Geschichte, Literatur, Religion und Kunst des indischen Kulturraumes*: 396–411. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht (= *Indogermanica: Festschrift für Wolfgang Krause zum 65. Geburtstag am 18. September 1960 von Fachgenossen und Freunden dargebracht*: 214–229. Heidelberg: Carl Winter).

Yaśodharā as Transmitted in a Tocharian B Fragment

SHŌNO Masanori

Since the extant Tocharian texts are chiefly related to Buddhism, the disciplines of Indo-European linguistics and Buddhology have cooperated right from the beginning of the academic study of Tocharian. Recently, moreover, the study of Tocharian has been making great progress both in terms of linguistics and philology. Nevertheless, some of the outcomes of early achievements have not been verified so far. This paper examines one of the outcomes.

There is a fragment, THT 109, the left side of which is largely damaged. As of 1953, the fragment was described as follows: “The context of the text, which has become opaque due to the gaps, can almost certainly be reconstructed by the use of a parallel from the *Saṅghabhedavastu* of the *Mūlasarvāstivādins*, that we owe to Prof. Waldschmidt (Der hier durch die Lücken undurchsichtig gewordene Textzusammenhang läßt sich durch eine Parallele aus dem *Saṅghabhedavastu* der *Mūlasarvāstivādins*, die wir Herrn Prof. Waldschmidt verdanken, mit ziemlicher Sicherheit rekonstruieren).” However, it has not been stated where the parallel from the *Saṅghabhedavastu* is. Presumably, the parallel is the Sanskrit *Saṅghabhedavastu* [ed. R. GNOLI, II 36.17–41.21], the Tibetan translation [bKa’ ’gyur, ’Dul ba; D Ņa 135b1–139a5, P Ce 130a1–133b2, S Ņa 181b4–187a2], and the Chinese [Taishō 24, no. 1450, 160c8–162a27]. However, Waldschmidt probably could not make use of the Sanskrit *Saṅghabhedavastu*.

THT 109 describes three scenes: (1) Yaśodharā seduces the Buddha with the offer of sweetness [THT 109a10], (2) Yaśodharā throws herself off a building [THT 109b2–4], (3) a narrative of a *kinnara* and *kinnarī* [THT 109b5–9]. In terms of each of the three scenes, this paper compares THT 109 with the *Saṅghabhedavastu*, *Mahāvastu* [ed. É. SENART, II 94.15–114.22; III 143.2–10, 271.14–272.17], *Da zhidu lun* [Taishō 25, no. 1509, 183a1–15], and *Jātaka* [Ja IV 282.16–288.23 (no. 485)]. It is only the *Saṅghabhedavastu* that describes Yaśodharā’s suicide attempt by throwing herself off a building. Therefore, of these materials, the *Saṅghabhedavastu* is the most informative for the study of THT 109. However, although THT 109a2–8 is associated with the *Saṅghabhedavastu*, it is not so close that “the context of the text ... can almost certainly be reconstructed.”

As researchers of Buddhism, we need to be deeply grateful for Waldschmidt’s contribution, and more interested also in Tocharian texts.